

母のけが

昭和五十四年 四年 女兒

「お母さんがだも、すべてしてみれば。」とスケートぐつをわたしたら、父が、

「すべてしてみせっが。うまいさげ。」といばったように言ったので、わたしはあてがはずれて、

「せば、すべてみれ。」と不まんげに言ってやった。父はちよつとへんな顔をしたがすべりに行った。母も父の後についてリンクにおりたが、よろよろとしか歩けない。すると父が来て、母のせ中をおすようにして、いっしょにすべって行った。そのすべてしている姿を見ると、なんとなく父と母が若く見えた。と思ったら母がころんだ。その時は、「ああ、まだころんでだ」と思ったがなかなかおきあがらない。よく見ると母の顔が青白くなっている、指をいたそうにおさえている。ちよつと心配になって見に行ったら、父が、

「指切てしまたなだ。」と話した。よく見ると血がいつぱいでいて、心配になり、気持ち悪くなってきた。

すぐ車に乗って、管原外科に行ったが正月の三日なので

休みだった。家に帰って荘内病院に電話したら、伊藤外科がいていると言うのでそこに行くことにした。兄は、「医者のおいきらいだからいがね。」と言った。わたしも、

「んだ。あのおい、やだもん。」と言ったが、心の中ではお母さんぬわっでんな見っでぐねがら、おっがねがらと思っっている。兄もきつとそうだろう。

それでわたしたちはるす番することになった。おもしろいテレビをつけて見ていたが、全然おもしろくなかった。お母さんだじょうぶかなとか、ぬったんがなとか、骨わられたんがなとか、心配でたまりません。三十分以上たっても帰らないので、ますます心配になってきた。しばらくして、

「あつきた。」と兄が言ったので飛び出して行った。よく見ると買い物してきたようだった。

「なんだ。買い物してきたんが。」と言った。ほっとしたが、けがしたところを見ると包帯をしている。

「ぬてきたな。」と兄が聞くと、

「うん。」と母が言う。

「なん針。」とすかさず聞くと、

「わがんね。二針ぐれでね。」と言うので安心した。

そのばんは親せきの家でごはんを食べた。次の日からは、わたしと兄がお母さんのかわりだ。ねぎなどを切ったりするのは兄で、ごはんをもったり、さらを洗うのはわたしです。この仕事もけっこう楽しい。けれどやっぱり母にやってもらった方がいい。それは母のエプロン姿がにあってから。それにもう一つ、家事は母じゃないとあわないから。だから一日も早く糸もとれて、きれいにくつついて、家事が出来るようになったらいいなあと思います。